



TITLE:

表紙・編集後記・目次

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙・編集後記・目次. 英文学評論 1965, 18

ISSUE DATE:

1965-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134994>

RIGHT:

英文學評論

第 XVIII 集

- シェイクスピアの“ヴィラン”(1) 尾 崎 寄 春
——その近代性について——
- スウィフトの『桶物語』 酒 井 幸 三
——詭弁と否定のレトリック——
- キーツとワーズワス 松 下 千 吉
- 『闇 の 奥』(1) 竹 森 修
- イエイツの叡智 大 浦 幸 男
——イエイツ生誕百年を記念して——
- I. A. Richards の価値論 角 倉 康 夫
- On Putting Pen to Paper James Crichton

京都大学教養部英語教室

目次

シェイクスピアの“ヴィラン”(1) ——その近代性について——	尾崎春……(一)
スウィフトの『桶物語』 ——詭弁と否定のレトリック——	酒井幸三……(五)
キーツとワーズワス	松下千吉……(八)
『闇の奥』(一)	竹森修……(一〇)
イエイツの叡智 ——イエイツ生誕百年を記念して——	大浦幸男……(一四)
I・A・リチャーズの価値論	角倉康夫……(一五)
On Putting Pen to Paper	James Crichton……(一—14)

編集後記

冬にエリオットを、夏に潤一郎を失う。時代が移りゆくのが感じられる。本誌も迎えて十八集、いたずらに年数を重ねて来たのではないことが望まれる。教育者であると同時に研究者でもあるわれわれが、研究の成果を問うのは義務である。しかし論文は業績かせぎであってはならない。そこには、表現を求める切実な主体的問題があるべきだ。書く勇氣と共に書かぬ勇氣もあるのではなからうか。

ところで最近また語学の教師への攻撃が強くなって来たようだ。一方で「役に立つ英語を」といい、他方で「大学は会話学校か」といっているうちに、教養の語学の授業は助手でも構わぬという声が、どこからかきこえてくるようになった。たしかに文学は「死の淵より」人間を救うことは出来ぬ。しかし言語がいかに人間の活動の中心にあるかを認識したならば、軽々しくそのような主張がなされるはずはない。将来の日本文化のために大いに憂慮される。

最後に教室事情——四月に寺田氏が教授に昇進され、岡氏が文学部（助教授）へ移られると、大阪女子大より尾形敏彦氏と、京都工繊大より酒井健三氏の両氏をお迎えして、総勢二十六名となった。七月には高谷文庫が完成し、U・C・L・Aとの交流計画の一番打者として嶋原氏が渡来した。教室談話会も増山氏「初期のメレディスについて」松下氏「ナッシュのソング—イン・タイム・オブ・ペステイレンスの第三聯」と運ばれていく。(Y・O)

英文学評論 第十八集

非売品

昭和四十年十一月十日 印刷
昭和四十年十一月十五日 発行

編集者

京都大学教養部英語教室

代表者 大浦 幸 男

印刷所

内外印刷株式会社

京都市下京区西洞院七条下ル

発行所

京都大学教養部英語教室

京都市左京区吉田二本松町

REVIEW OF ENGLISH LITERATURE

Volume XVIII November 1965

CONTENTS

Shakespeare's "Villains":

A Preliminary Survey (1)	<i>Yoseharu Ozaki</i>
Swift's <i>A Tale of a Tub</i>	<i>Kozo Sakai</i>
Keats and Wordsworth	<i>Senkichi Matsushita</i>
Joseph Conrad: <i>Heart of Darkness</i> (1)	<i>Osamu Takemori</i>
The Wisdom of W. B. Yeats	<i>Yukio Oura</i>
I. A. Richards' on Value	<i>Yasuo Kadokura</i>
On Putting Pen to Paper	<i>James Crichton</i>

ENGLISH DEPARTMENT
COLLEGE OF LIBERAL ARTS
KYOTO UNIVERSITY